

## ケラーの「七つの伝説」における ファンタジーと現実の弁証法的位相

中野和朗

(一)

Romantik と Realismus は、いずれのイデオロギー的立場にたつものであれ、文学史においては、翻然と区分されているのが普通である。しかし壮大な人類史の中にあっては、これら文学的、内至は哲学的、思想的潮流も、重要なものではあるが、ほんの局部的な文化的現象なのであり、人類史の総体の中では両者は分かちがたく関連し合い、混然一体となっていると言うべきではなからうか。romantisch なものも realistisch なものも、とどのつまりは人間の知的活動、ひいては人間の“生産労働”という同一の母胎からの所産なのである。しかし階級対立の止揚されぬ、いまだ人類の“前史”の中にある現実の尖鋭な政治的時代にあっては、全てが政治的であることをまぬがれ得ず、従ってこの両者も夫々に政治的に位置づけられ、美か醜か、善か悪か、健康的か病的か等々といった、究極的には政治的な価値判断の十字砲火を浴びることになるのである。人類史のいまだ野蛮な今日の発展段階においては、まさに発展を促すエネルギーそのものとして、あらゆるものに「対立矛盾」は不可欠のものとなっている。Romantik と Realismus が、ますます尖鋭な対立物として概念規定され、評価されるのも、このような歴史的必然性の故であってみれば、矛盾対立的状況に背を向けることはできないであろう。それぞれの本質的で包括的な厳密な認識が要求され、つづいては「どちらの方向へ顔を向けるか」、「どちらの側に立つか」の選択が強要され、これをもまた決して避けることはできないのである。今日の政治的状況は、選択を留保する立場をますますきびしく拒絶する。選択の留保そのものが、すでに一つのれっきとした政治的立場となり、個人の意識とか思惑とはいっさい関わりなく、どちらかの側に立ったことを客観的に表示することになる。

Romantik と Realismus の対立的状況もすくなくとも、“前史”が止場される時までには、弁証法的統一の中間的位相を現しながらいつまでも続くことになるであろう。

Romantik と Realismus という Dualismus の弁証法的位相のもっとも興味ある範例は、あのルネッサンス的近代人、ゲーテにおいて認めることができる。

Sturm und Drang の仕掛人、「ヴェールター」と「ヴィルヘルム・マイスター」の著者は、また、Klassik の大立物であり、「ゲッツ」の作者でもあった。そしてなによりも、ゲーテ総体の権現、全著作の総集篇「ファウスト」は、まさに romantisch なものと realistisch なものの“るつぽ”といえよう。

すぐれた文学が、人間世界の真実のよりの確な認識とそれのよりゆたかな芸術的創造を含むものとするならば、そして「ファウスト」がまさにそのような文学のもっとも偉大な範例とするならば、人間世界は、とりもなおさず romantisch と realistisch なもの、さらにはそ

れに連がるさまざまな次元の Dualismus の混沌とした様相を展開しているダイナミックな弁証法的世界ということになる。

このようなゲーテ的範例は、膨大なドイツ文学史の中にさまざまな形姿をとってそのほかにもいくつも発見できる。例えば、ゴットフリート・ケラーである。

「緑のハインリヒ」は、紛れもなくケラーの「ヴィルヘルム・マイスター」にほかならず、「ゼルトヴィーラの人びと」や「七つの伝説」「チューリヒ短篇集」「寓詩物語」等々の短篇集には、そのほとんど全てに小ファウストや小メフィストフェレス、さらには小グレートヒェンがなんと数多く出現していることか。

ケラーの文学も、他の第一級の世界文学の例にもれず、例えば、エミール・シュタイガーとルカーチ、マルティニーとゲールツに代表されるような対立的観点からの評価をはじめさまざまな見地から評価をうけている。しかしおおよそのところ、どうやらルカーチに代表されるリアリストとしてのケラーの評価が、主流となっているように思われる。とはいえ、いづれの立場からの見解も、のびきならぬ政治的状况を反映して、当然のことながら、政治的なそれぞれの立場の“信仰告白”となっていることは言わずもがなのことである。

「彼岸の否定は現世の肯定につながり、彼岸におけるよりよい生活の否認は、この地上でのよりよい生活の要求をほらむ。神への愛に人間への愛が、よりよい未来へのいたずらな期待に対して有益な活動の義務がとってかわらなければならない」<sup>1)</sup> というフォイエルバッハの現世讃美の教義の受洗者として、ケラーは大地にしっかりと足を踏まえ、世俗の人間への愛の讃歌を高らかに謳っている。ケラー文学の至るところに、たしかにリアリストケラーの面目と栄光が輝いている。しかし、ケラーのリアリズムの勝利である「ゼルトヴィーラの人々」の諸篇の中にはまた、なんと豊に、活き活きと romantisch なものが息づき、己れのレーゾンドートルを主張していることか。「馬子にも衣装」や「仔猫シュビーゲル」の、あの得体のしれぬ不思議な魅力はいったいどこからかもし出されているのか。その秘密は、多分偏狭な政治主義の硬直した感性には閉ざされたままであることだろう。その魅力は、まさしく romantisch なものと realistisch なもののアラベスクの中から放射されているといえるのではないだろうか。

「七つの伝説」は、このようなものの延長線上に築きあげられたケラー文学の一つの頂点であり、ケラー文学の本質をもっともよく示めている作品なのではないかと思われる。

ところで、ここに「七つの伝説」についての興味深い指摘がある。『十九世紀のドイツのリアリスト達』に於いて、ルカーチはケラーの『七つの伝説』に関しては全く触れていない。ルカーチがケラー論の中でこの作品に就いて直接触れていない事が、直ちにルカーチによるこの作品の軽視を意味しないとしても、ルカーチが当今の有力な批評家であるだけに、この取扱いやはりこの作品に対する現代の一面を物語っている。更に R. Drews も彼のケラー論の中で『伝説』の売れ行きは成功であった。特筆すべき事はケラーの全作品中恐らく最も意義の少ない正にこの作品が成功を取めた事である。併しこの作品こそ現実に対し殆ど関心のなかった当時のドイツの読者をば特に惹きつけたのである』とルカーチの論法を正当化している。<sup>2)</sup> この論者はたいへん礼儀正しく謙虚な言いまわしをしているが、ルカーチが、この作品に言及していないという事実は、やはりこの作品への軽視を毅然として示めていると言うほかない。また Drews は、卒直に「ケラーの全作品中恐らく最も意義の少ない正にこの作品が」と述べている。

以下、「七つの伝説」の各篇を分析し、いったいこの作品は、はたして「全作品中最も意義の少ない作品」なのかどうか、またリアリズムという点から眺めてもそれほど軽視されるべき作品なのかどうかを点検してみることにしよう。

(一)

最初に置かれている「伝説」は「オイゲニヤ」である。このお話しの女主人公オイゲニヤは、学問の花ひらくアレクサンドリヤの名望家のローマ人の娘で、「ミューズの再来」と評判をうるまさに才色兼備の女性である。しかもかの女は、「初期のキリスト教の敬虔な伝説の世界にもすでに現われている、家庭や社会の慣習から脱げたいという欲望に駆られた聖女たち」と同列の女性なのである。長ずるにしたがい美貌とともに学識もますます男まさりのものになっていく。世間はこのような女性をはおっておくはずはなく、当然のことながら一人の立派な青年が現われ求婚することになる。それは地方総督のアクイリヌスである。かれは、アレクサンドリヤ一番の色男であり、智情兼備の徳望ある紳士で、娘の父親もアクイリヌスに勝る筈はないと思っており、またオイゲニヤ自身も「かなり前からひそかにかれに目を留めていた」といった次第で、この話し、とんとん拍子で美男美女のカップルの誕生かと思わされるのである。ところが、アクイリヌスの結婚申し込みにたいしてオイゲニヤは、「私が夫をもつとしましたら、私は先ず第一条件として、私の精神生活や努力を理解し尊敬して、それに協力して下さることを要求したいのです」と応え、結婚前にしばらく精神的な研究を共同で行ない、お互いの理解を深めたいと言う。それに対してアクイリヌスは「私はもう一度学校に行くためにここに来たのではありません。結婚の相手を連れに来たのです。——さあ、どうか学者としてではなく、血も涙もある一人の女性として返事をしてください」と言う。これを聞いて、オイゲニヤは「あなたのお話であなたが私を愛していらっしゃるのことが分かりました」と答え、結婚話しはこわれてしまう。その後数年たってオイゲニヤは、男装をしてある僧院の戸をたたき、そこで修道僧となり、オイゲニウスと呼ばれる。精進を重ねて高名な僧となり、やがて僧院長になる。娘の失踪に傷心の父親はオイゲニヤの大理石像をミネルヴァの神殿に立てる。世俗の女を崇拜し神を潰すものと受けとられたこの新しい偶像を、打砕くためにオイゲニウスは夜中に大理石像のところへ来る。ところが彼女はその美しく婉な自分の彫像を見て、不思議な戦慄にうたれる。しかもあのアクイリヌスがその像に近づいてそれを恍惚と眺めたうえ、唇を大理石の唇に押しつける場面を目撃する。オイゲニウスは像を打砕くどころか溢れ出る涙に濡れて像に接吻して去る。

さて翌日、病気でキリスト教に救いを求めているある上流の未亡人の頼みを受けてオイゲニウスはそこへ出かける。ところが、この三十に満たない未亡人は、オイゲニウスをすっかり若い美男の僧と信じこみあやしく誘惑する。おどろいたオイゲニヤはそれをとがめる。自分の企みの失敗を悟った未亡人は、手練手管を用いてオイゲニウスが破れん恥な行為に及んだと騒ぎたてる。このためオイゲニウスは、アクイリヌスの裁きをうけることになる。進退谷まったオイゲニヤは、アクイリヌスに全てを打ちあける。彼はその告白を聞いてただちには信じない。そこでオイゲニヤは「羞恥と絶望に打ちひしがれて着ていた僧衣を真二つにひき裂いて」棄てる。オイゲニウスが昔のままの貞潔なオイゲニヤであることが判り、二人は大へんな遠まわりをした挙句にめでたく結ばれることになる。

「オイゲニヤは、今では詭弁を慎んで、かつて哲学やキリスト教の修業に捧げたと同じ徹底的な根気強さで、夫婦の愛情と貞節の研究に没頭しました」メダタンメダタンでこの話は終っている。ケラーは茶目気を發揮して、「彼女に代顔を頼むと、とくに学業に遅れ勝ちな怠惰な女性徒に御利益があるということです」という一行を最後につけ足している。以上が「オイゲニヤ」のあらすじであるが、オイゲニヤとアクイリヌスの恋愛のまわりくどく、じれったい過程は、ケラーが「ゼルトヴィーラの人びと」の諸篇、例えば、「失われた笑い」「馬子にも衣裳」「仔猫シュベীগエル」や、「緑のハインリヒ」の中でさまざまなヴァリエーションとして描いている特徴的なパターンであるが、「オイゲニヤ」には特に色濃く、ペッティ・テンデリングとの恋愛の体験が反映していることをいうかがい知ることができる。それはさておき、ケラーはこの「伝説」で何を言わんとしているのでしょうか。ケラーはこの説話のタイトルにそえて、「モーゼ書第五卷22の5」から次の訓おしえを引いている。

「女は男の物を著ることなく／男は女の衣裳を纏う勿れ／凡そ斯くの如き行為を／汝の神、主は厭ひ給へばなり」

この訓はつまるところは世俗的な社会倫理でいえば「女は女の分際をわきまえろ」ということであり、男性社会のモラルに合致している訓といえる。

するとケラーのこの説話における狙いはこの訓なのであろうか？とすると、「男の物具をつけた女」オイゲニヤが、一見とがめられている様に見えるながら実際は、幸福な結婚を獲得している結末はどう解釈したらよいのだろうか。しかも女の分際を忘れたオイゲニヤが事もあるうにその訓が最も守られねばならぬ城であるべき修道院に男装をして乗り込み、わんさといふ男共を尻目にどンドン社会的に認められ、ついには「うら若い女の手で、老若併せて七十人もの修道僧を司る僧院長」となってしまう。このことはどう説明したらよいのか？実はこれは「モーゼ書第五卷22の5」の訓に対するケラーの猛烈な嘲弄をせしめているのではないだろうか。そしてこのことは、がんめいころうなカトリック教会への若きケラーのあの激しい反抗と、フォイエルバッハ哲学の受洗者としてのケラーを考あわせれば十分うなずけよう。ケラーはここでは、閉ざされた「性」と「女性」の解放というタブーに敢然と立ち向う民主主義の戦士として現われているといつてよいであろう。カトリック的禁欲に対してケラーは、熱き血の通うふくよかな女性の肉体を大らかに讃えている。「ケラーのいつも尊重したのは真実と自然であったが、これが女性の場合には純粋な心情と性的なものを含めての肉体性である。ケラーの嫌悪するのは性を喪失した青踏派的な『精神的』女性である。女性がその肉体にひそむ自然を忘れて、一面的に精神に向うことは決して女性を高める所以ではなく、かえってその性的自然に素直であって、妻として又母としての天与の使命を果すことによって、精神的にも高められるとケラーは考える」<sup>9)</sup> という指摘に代表される、これまでのいくつかの「オイゲニヤ」解釈は、決してまちがってはいないが、反カトリックの観点が欠落しており、一つの側面の評価におわっているのではないだろうか。

第五番目の伝説「破戒の聖僧ヴィタリス」も、モチーフの点で「オイゲニヤ」と軌を一にしている説話である。

この伝説の主人公は、八世紀のはじめアレクサンドリヤに住んでいた、風変わりな僧侶ヴィタリスである。彼は、何故か倫落の女の救済——「道に踏み迷った女の心を罪の道から救い上げて、正しい行いへ連れ戻すこと」——を自分の特別な使命としている。ところがやがて彼の執拗な努力にもかかわらず、頑固に改心を拒みつつける手強い女が現われる。ヴィタリ

スは、「女の身のうちに巣くっている悪魔」との闘いに己の存在意味をさえかける殉教者となる。その闘いのために彼は、いまや賽銭泥棒となり、正当防衛とはいえ、女の用心棒殺しの罪さえ犯す文字通りの破戒僧になり下る。たまたまこの女の家の真向いに住んでいた一人の金持のギリシャ人の一人娘ヨーレが、この悪評高い僧の行状に関心をいただき、事柄の真相を知る。かの女は、「ヴィタリスが娼婦に騙されていることや、またこの僧侶に関する真相を聞くと、ひどく驚いて、殉教的態度を尊敬するどころか、不思議な怒りに襲われ、こういった種類の神聖は自分たち女の名誉に少しも益するところが無いと考えた」(p.80)。そこで同情と怒り半ばに、かの女は一計を案じ、この成算のない闘いからヴィタリスを解放してやることになる。うぶな小娘のこの所業は、実は聖母マリヤのひそかなる意志によるものなのだとケラーはひと言断わっているが、それは、読者にこれはレゲンデなのだというを思い出させるためだけのものと思われる程のもので、事態はきわめて合理的、現実的に処理されている。ところがヨーレは、一晚中身近にいた間に、以前遠くで考えていた頃よりもこの僧侶が好もしく思えてくる。彼の物腰、態度にも好感をいただく。「その上彼の自己犠牲と、一度選んだものを飽くまで守り通す堅忍不拔な精神を考え合せると、彼女はこれらの美点を自分の利益や楽しみになるように用いたいものだと考えざるを得ませんでした。しかもそれは愛する誠実な夫としての姿でした。そこで彼女の使命は、この殊勝な殉教者をもっと立派な夫に仕立てることでした」という次第になる。

そしてヨーレの積極的な愛の告白にヴィタリスは当惑し、どう対処すべきか迷いに迷うのであったが「しかも彼の心の底にはもうほの暗い大濤が理性の小舟を譟弄しはじめ」ていた。思案にあまってマリヤ像の前に身を投げて教えを願うのであったが、そのマリヤの顔さえもがヨーレの顔つきに見えてくる有様であった。しかし気をとりなおし、再び殉教者としての使命感にもえてこの小娘の頭から無益な妄念を追い払おうとヨーレのもとへやってくる。すると「花のように白いベッドの上にはヨーレが美しく着飾って惱ましげな愁いを湛えて、想い悩んでいる天使といった風情で坐っていました。美しい襲のある胴着の下で胸は揺れているうつわの中のミルクのように大きく波打っており、乳房の下に組合わされた白い腕は、美しく輝いていた」。智慧があり弁説も巧みなヨーレは、自分は救われたいがそのためには恋愛については無知で無能な坊さんの姿をしてはいけけない。僧服を世俗の人間の服に着替えて欲しいと注文しそれを実行させる。「ところがこの時僧侶には全くの奇蹟と云いましょうか、不思議な変化が起りました。それは、彼が平服を着て美しい少女に並んで坐るか坐らないうちに、ついさっきまでのことが風に吹き払われたように消えて、彼は自分のもくろみをすっかり忘れてしまった」。まさにこの様な場面こそ伝説の効用であり、話しの筋道になら破綻をきたすことなく事態を進行させることができるのである。さて、ヨーレは世俗の人間になったヴィタリスに己れの身分と事の真相を打ち明け、幸福な正しい恋愛について美しい言葉で知識を与え、父親への結婚申し込みをすら求める。彼は、上等なワインや食事をすすめられるうちすっかり寛いだ気分になり、長い苦勞から休養したい気がしてヨーレによりかかったまま翌朝まで寝込んでしまう。目を覚ますと派手な平服を着込んだわが身におどろくが、利口なヨーレは、その間に僧服を焼却してしまっていた。しかしやがて意を決したヴィタリスは、その姿のまま僧院へ赴く。僧院では目に余るヴィタリスの破戒の行状はもはや許すすことはできないと丁度追放が決まったところで、彼は逐い出される。彼はヨーレの望みに従った。この伝説の最後には次のように記されている。「ヴィタリスは今ではかっ

て殉教者としてそうであったと同じく、立派な、非のうちどころない人間であると同時に、また良人でもありました。教会は事の真相を知ると、このような聖者が辞任したことを諦めかねて、この逃走者を元の懐に引戻そうと八方手をつくしましたが、ヨレは夫をしっかり捉まえていて、夫は私のところで充分幸福に暮しておりますと云うのでした。

さて、例によってこれにも「唯一人の女人との親しき交りを避けよ、数多の敬虔なる者を神に薦めんには如かじ」（トマス・ケンピス、キリストのまねび8・2）という一文が題名にそえられている。そしてオイゲニヤの場合と同様、ヴィタリスの行状の最後は、なんとも皮肉なことにこの訓に逆行しているのである。しかも敬虔な人間を神に薦めることを止め、禁止されている唯一人の女人との親しき交わりに身を投じた破戒の僧は、マリヤの祝福を受け、幸せいっぱいの生活を得ているのである。

ここにも明らかに、ケラーのカトリック的禁欲への嘲弄、というよりも痛烈な批判が見てとれる。

自然の女性の肉体を回復して、オイゲニヤは幸せを手中にしたが、ヴィタリスも禁欲的殉教から解放されて自然の男性を回復して幸福となる。

フォイエルバッハ哲学の徒としてのケラーの面目が躍如としているといえる。

さらにもう一つのテーマが見てとれるが、それは、このあとに扱われるゲビッツォ伯爵（「聖母と悪魔」）や、代官ファブリチウス（「ドロテヤの花籠」）とともに類型化できる、疎外された人間としてのヴィタリス像をめぐる問題である。僧院から追放されて本来の人間性を回復する以前のヴィタリスは、「善」——禁欲的カトリックの教義にもとづくものにすぎないが——をほどこそうという動機から発した行為であるが、まさにその殉教の行為はグロテスクともいえる異常さを帯びている。人間性の最も本源的な条件を喪失している人間として、俗人に戻る以前のヴィタリス像は、まさに猛烈人間として疎外された現代人像にオーバーラップしてくる疎外像を見事に描いているといえよう。

また、この両篇には、大理石像やマリヤが断片的に登場しているが、しかし *romantisch* な要素、メーメルヒェンの要素は他の五篇に較べてもっとも稀薄であり、*realistisch* な要素が勝っているといえる。

## (三)

「七つの伝説」には、三篇の聖母マリヤ伝説が含まれている。第二篇「聖母と悪魔」第三篇「騎士に扮した聖母」そして第四篇「聖母と修道尼」である。第二、第三篇は、女主人公ベルトラデーが共通して登場し、いわば続き物である。いずれも話の筋は単純明快で、聖母マリヤが姿をかえて主人公達の身替りとなって、主人公達の窮地を救い幸福をもたらすという筋立てである。

「聖母と悪魔」の主人公は、たいへん美しく気だてのよい女性ベルトラデーである。夫のゲビッツォ伯爵は、国一番の金持ちと呼ばれるお大尽で、金に糸目をつけぬ華やかな生活にあげくれる一方で、修道院や慈善病院を設立したり、寄附をしたり、貧民救済に気前よく施しをするのが道楽であった。昔から、陰る程の財宝をもちながら、世間から賞めそやされることだけが生き甲斐という、無能で脆弱な破滅型人間はよく見られるが、その例にもれずゲビッツォも、まもなく乞食同然まで零落してしまう。しかし、「ただ一ついまでも変らぬものがあ

りましたが、それは彼の妻のベルトラーデの美しさで、……その美しさは輝きを加えるように見えた。しかもその貞淑と愛情と親切は、ゲビツォが貧しくなればなるほど一層加わってゆきました」。しかし彼にはその宝物の価値がわからない。

ある復活祭の日、すっかりいぢけきったゲビツォは、深い森の中の湖で船頭に変装した悪魔に会い、いま彼に残された唯一の何ものにも替えがたい美しい宝物である、妻のベルトラーデと引き替えに、望むだけの金貨が無尽蔵に出てくる打出の小槌（この場合は一冊の古ぼけた本となっている）を手に入れる。そのお陰で彼は、以前にも勝る道楽にあけくれることができる。美しい妻との取引きで得た金で彼がなしたことについては次のように書かれている。「そこで彼はふたたび世間へ顔を出し、所領を請け戻し、職人を呼び寄せて、以前にもまして壮麗な邸宅を築かせ、位に即いたばかりの君主のように各方面に慈善を施しました。なかでもいちばん大きな事業は、五百人からの最も信仰の厚く身分の高い僧侶を收容する大なる修道院の建立でした」。ここにもやはり、「オイゲニヤ」や「ヴィタリス」に鳴り響いていたカトリック教会へのあの突撃ラッパが勇ましく鳴り渡っている。慈善事業や修道院建立の大金持からの多額の“浄財”の実態がファンタジーの衣につつまれてはいても、だからこそ単純明快に暴露されていると観ることができる。

さて、悪魔との約束に従い、ワルブルギスの前夜、ゲビツォは、悪魔に引き渡すため森の奥の湖畔にベルトラーデを連れて行く。ところがその途中、かってベルトラーデが慈悲深い気持から建てさせた礼拝堂に立ち寄るが、彼女の保護の願いに聖母マリヤは、ベルトラーデを深い眠りに誘い、自分が彼女の身替りとなって、素しらぬ顔でゲビツォに従って行く。黒い馬に跨って、きらびやかな騎士の姿で現われた悪魔に、ベルトラーデになりかわったマリヤを引き渡すや、ゲビツォは後をも見ずに逃げ帰る。実は、この強慾非情な男は、まことにうまい具合に、これというなんの必然性もないのに道に迷い、人馬もろとも谷底に落ち、頭を碎いて即死させられてしまう。また、悪魔ともあろうものが、ベルトラーデは偽物であって、マリヤが身替わりになっていることを看破れぬはずがないのだが、何故かここでは悪魔は、魔力を突然失っているのである。多くのメールヒェンや伝説は、ここぞという時にはきまって理屈では割りきれぬ意外な事態を自在に現出させるものであって、これがメールヒェンや伝説の奥の手であり、また許容された独自の特権であり、この辺がたまらぬ魅力の秘密でもあるといえる。

さて、想いこがれた美しい生身の女を手中にしたと思ひ込み、有頂天の悪魔は、魔力をふるってムード満点の恋愛場面にあふさわしい情景を現前させる。それはまさにロマン派が憧憬し讃美して詠った、大理石像、噴泉、星空、月の光等々といったものに満ち溢れている。悪魔は、情熱をこめてマリヤに愛を求め、「頬笑みながら腕をひろげた美しい女の胸に、男は情熱的に身を投げ出したが、その瞬間、聖母はその神々しい姿にかえり」悪魔をこらしめたのであった。悪魔と聖母との天空を戦場にしての壮大な闘争場面は、まことに愉しいファンタジーのあやなす世界であり、ファンタジーが輝かしい凱歌を謳っている。

聖母は悪魔をこらしめて礼拝堂に戻る。眠りから覚めたベルトラーデは、眠っている間にマリヤの奇蹟によって救われたことも知らず城にもどり、夫をねんごろに葬い、数限りない供養を行なった。彼女自身の愛情や優しさに変りはなかったが、「どういふわけか亡夫への愛情はあとかたもなく心から消えてしまった」。そこでマリヤは、ベルトラーデのために素晴らしい後添えを探してやり、その取もち役を果たすのであるが、その次第が次の「騎士に扮した

聖母」の内容である。

ベルトラーデの後添えとして聖母に目をつけられたのは、若い騎士ツェンデルワルトである。この男は立派な騎士ではあが、動作も言葉もどうしても人様よりワンテンポ遅れてしまうという部類の人間で、肝心な時になるとはっきりとした自己主張ができない、内気なお人好しで純朴な男である。いわゆる「ジンプリッツィムス」を原型とする幾多の「ドイツ教養小説」のあの愚直なる主人公たちの列につらなる者で、「ハインリヒ」の面影を想起させる。故郷にはしっかり者の母親が一人、つつましい暮らしをして彼の帰りを待っているという設定は、ますますツェンデルワルトのハインリヒ・レーへの近似を強めさせている。皇帝の計らいで武芸大会が催され、その勝者はベルトラーデを妻とすることができる。皇帝の使者として一度ベルトラーデに会ったことのあるツェンデルワルトは、実は彼女に一目惚れしていたのであるが性来の内気さから諦めている。しかし母親に励まされて武芸大会に参加すべく出発する。途中、やはり例の礼拝堂にさしかかりそこに立ち寄る。すると、かつてベルトラーデに起ったと同じ奇蹟がマリヤによってなされる。愚直な騎士に身をやつした聖母は、武芸大会に参加し、当然のこと乍ら優勝し、ベルトラーデをツェンデルワルトのものとする。二人は祝福された結婚をし幸福に暮らしましたとさ。めでたし、めでたし、でこの一篇は終わっている。

三つ目の聖母伝説「聖母と修道尼」も、筋立ては以上の二つと同じパターンで展開している。この話しの主人公は、若く美しい修道尼ベアトリクスである。彼女の若い血は、世俗への抑えがたい慍懣にかりたてられる。ある六月の夜、「私は胸の中にもえる火をこれ以上抑えておくことはできない」と聖母に告白して、修道院を遁げ出す。そして翌朝、最初に会った騎士ヴォンネボルトと意気投合し、彼の居城へ行く。二人はその途中馬上で接吻をかわし周囲の景色も眼に入らぬ状態で、ベアトリクスは城について彼女の渴望をいやしたのであった。そしてこの二人の歓喜に満ちた生活が始まった。しかし正式に結婚したわけではなかったので、彼女には名誉もなく奴隷と変らぬ扱いをうけている。ある時訪れた外国の男爵との賭けでヴォンネボルトは、ベアトリクスを失うことになる。彼は、彼女を失ってはじめて、彼女なしでは生きてはいけないことをさと、巧みな機転によって男爵の手を逃れて戻ってきたベアトリクスと正式に結婚し、幸せに暮らすことになる。二人は、十二年の間に八人の息子をもうける。長男が十八才になった時ベアトリクスは、こっそり修道院へ戻る。ところが修道院ではこの間、聖母マリヤがベアトリクスの身替わりをつとめていたのであった。更に十年後、聖母を讃える祭りの最中に、戦場に赴くヴォンネボルトが、八人の騎士となった息子達を引連れて修道院に立ち寄った。その時ベアトリクスは、皆に聖母の奇蹟をうち明けたのであった。この話しにもカトリック的禁欲の秩序へのベアトリクスの反逆が、あろうことか聖母マリヤの奇蹟によって援助されるという、奇抜な発想が描かれているのであるが、これもケラーのあの反カトリックの烈々たる反抗がなさしめる業<sup>わざ</sup>というべきである。

以上見てきたとおり、三つの聖母伝説の中には、ファンタジーが自由奔放にその翼をはばたかせているのであり、きわめてリアルな問題がその中に包みこまれて、romantischなものとrealistischなものが見事なアラベスクを織りあげている。

ところで、これまでの伝説中に現われた、破戒僧ヴィタリス、強慾非情なゲビッオ伯爵の像は、「ドロテヤの花籠」に登場する頑迷な代官ファブリチウスとともに、「ゼルトヴィーラ

の人びと」の中に描かれている「三人の律義な櫛職人」や、ジョン・カビス、リトムライ老人、ピナイス等々といった、どこか人間としては歪んでいる異常な性格の所有者に属している。

W・カイザーに言わせると、これらは全て、「グロテスクなもの」(Das Groteske)<sup>5)</sup>に包括されるであろう。彼は「われわれの日常世界、われわれが毎日かかわりをもつさいな、うわべだけでは親密な物たちが、なじみのない邪悪なものであり、敵意あるデーモンにとりつかれているということが判明する」<sup>6)</sup>「ケラーは、グロテスクなものを表現するにあたって魔神的なものを人間化したり、抽象を具体化したりする。彼はグロテスクなものの独特の表現法を発展させているのである。彼の文学はリアリズムと呼ばれてもかまわないが、無気味で不可解な暗い力が彼の世界のリアリティに属しているということ、またどんなに深く彼の明るい眼差しが洞察し、どれほど朗らかに微笑ませることを好むとしても、彼が深淵の恐怖に無縁でないということを見誤ってはならない」<sup>7)</sup>と書いている。彼によると、底知れぬ生への不安のひそかな解消や、「暗闇が見究められ、無気味なものがあばかれ、不可解なものが釈明を求められ」<sup>7)</sup>ているが、それに応えるのが「グロテスク芸術」なのだという。しかし、的確な科学的な現実認識の方法が獲得されていない場合には、不可解な怖ろしい事柄は全てデーモンのなせるしわざ——つまりグロテスクなもの一般として把握される外ない。W・カイザーにあっては「無気味で不可解な暗い力」の実体が客観的に把握されることがない。しかし、ケラーは、なるほどカイザーの云う様な「グロテスク」といえるさまざまな人間像を描いてはいるが、ケラーはそれらの出現の秘密を十分、明確に認識していたのであり、この様な認識を前提としているからこそ、あの様にリアルな形象を創造し得ているのではないのか。ケラーは、不可知なデーモンのしわざとして、「グロテスク」な人物をとらえているのでは決してないのだ。ケラーの「グロテスク」な人間像は、まさに疎外された人間として把握されたものなのである。この点での異義申したてはあるが、カイザーの次の指摘は肯定できる。ケラーは、「ロマン主義が開示してくれた豊かな可能性をグロテスクな人間の姿態をあらわすのに採り入れたのである。」<sup>8)</sup>

#### (四)

第六篇の「ドロテヤの花籠」と、最終篇の「舞踏の伝説」は、この短篇集の中でもっとも romantisch な雰囲気 に溢れている。

ドキヤ州の代官であり宗教審問官であるファブリチウスに懸想されている、美しい貴族の娘ドロテヤは、実はファブリチウスの書記であるテオフィルスに想いを寄せている。テオフィルスもドロテヤを恋しているのであるが、ケラーの作品にしばしば登場するどこか人にうちとけないひっこみ思案の青年の一人であり、一方ドロテヤもオイゲニヤの系統の一人で、自分の感情に素直に従ってふるまうことのできない女性である。従ってこの恋人達は慕い合いながら苦しみ合うという、世間にまま見られるあの悲劇的恋人達なのである。一方ファブリチウスのドロテヤへの懸想はつるばかりであったが、ドロテヤに冷たく応じられると、異端審問権を発動し拷問台にドロテヤを送る。ドロテヤは、意志強固にキリスト教への帰依とファブリチウスの愛の拒絶をつらぬく。こうしてついにドロテヤは処刑される。ドロテヤ、テオフィルス、ファブリチウスの三角関係と、ドロテヤとテオフィルスの齟齬がこの話しを

大悲恋物語りとしているのであるが、ここまでは、よくあるお話なのである。しかしこの後の、つまり結末部分は、量的にはまことに短いのであるが、まさにファンタジーの世界そのものであって、最も興味深く、問題をさまざまに発掘できる箇所である。結末部分はこうなっている。

テオフィルスは、ドロテヤから天国の贈物として、<sup>16</sup>薔薇の花に包まれた楽園の禁断の木の実(りんご)が三箇入った籠を受けとる。りんごには二枚の小さな前歯で軽く噛んだ歯型がついている。テオフィルスもそれを噛る。すると激しい憧憬が妖しく胸を焦がす。そして自からドロテヤと同じ信仰に帰依することを代官に申し出、意図したとおり直ちに処刑される。

こうして地上で結ばれなかった恋人達は、天国でめでたく結ばれることになる。しかし、「そのうち二人は楽しさに我を忘れてすっかり崇峻な三位一体の水晶の御座所の側に近づき過ぎ、その中へ入ってゆきました。そこで二人は気を失い、ちょうど母親の胸に抱かれた双児のように眠りこんでしまい、もしふたたびそこから出て来られなかったなら、今もお眠り続けていることでしょう」と結ばれてこの話は終わっている。

このファンタジーの世界の中で、フォイエルバッハ学徒であるケラーが、ネガからポジへと焼付けようとしているものは何なのであろうか。地上での恋を成し得なかった恋人たちが、天上の楽園で解放され、幸福を獲得するという、額面通りのキリスト教伝説の範例であろうか？いやそれは全く逆なのではなかろうか？つまり、天国でドロテヤとテオフィルスは、一見、自由で永遠の幸福を得させられているかに見える。しかし、よく注意して観れば、実はこの恋人達は、「三位一体の御座所」に近づき過ぎ、それこそ永遠の眠りの中に閉じ込められてしまっているのである。つまり「三位一体」に埋没することによって二人は、無の存在に化されてしまっているのである。このことは、カトリック教会の説く、天国での救済、天国の幸福へのケラーの痛烈な一撃なのではないのか。「ドロテヤの花籠」の結末部分をこのように解釈することによって、はじめて、この美しいファンタジーの世界の中でネガからポジへと焼付けようとしたケラーの真実が——Realität が——明確にされるのではないだろうか。

さて、「舞踏の伝説」は、「ドロテヤの花籠」以上に、最初から最後までファンタジーに塗り固められた一篇である。

良家の生れの可憐な娘のムーザは、お祈りをしている時をのぞいては必ず踊っているほどの踊り好きの癖をもっている。ある時、聖母マリヤの先祖のダビデ王が現われ、天国で踊りながら永遠の幸福を得て暮らさぬか、嫌といえば地上で踊ることを断念せねばならぬが——と誘う。この世で踊ることの楽しさに未練のあるムーザは、天国での楽しさに疑問をいだき、返事を俊巡する。しかしダビデ王の魔力により王の望み通りにすることを誓う。こうしてムーザは昇天する。天上では丁度大祭日であった。そして平生は地獄におとされている九人のミュージック達も招かれていた。ムーザも彼女たちの仲間に加わりたのしいまどいをたのしむ。ミュージック達は天国でのこの好意と親切に感謝の意を表すため、頌歌を練習し、四部合唱をつくり、天国の次の祭日に披露する。「やがてその歌は高らかに響き渡りました。しかしこの世界では、その歌はいかにも陰気な、いや、ほとんど反抗的な荒々しい響きがして、なおその上やるせない懣れで哀訴するように聞えましたので、はじめの間ははっとしてなりをひそめていたみなのは、やがて誰も彼も地上の苦悩と郷愁に捉われて、声をそろえて突然泣き出してしまいました」。こうして天国は、この歌声に大混乱を生ずる。最後に貴い三位

一体が姿を現わし、「夢中でうたっているミュージズたちを股々と鳴り渡る雷鳴で沈黙させてしまいました。そうして天にはまた平穏と落ちつきが戻りました。しかし哀れな九人の姉妹たちは天国を去って、それからのちはふたたび天国に足を入れることを許されませんでした」ということでこの話しは終わっている。以上たどった話しの概略からもすでに明らかとなり、このファンタジーの世界の中にやはり、リアリストケラーの醒めた問題意識がきらりと光っている。異教の神ゆえに地獄におとされているミュージズたちの歌う歌は、天国を讃える聖歌の形式を模してはいても、つまるところは地上讃歌の歌なのであり、これが天上の秩序を乱し、天上の幸せと矛盾をきたすのである。

踊り子ムーザは、現世快楽の象徴としての踊りを享受する者、現世享楽肯定の象徴的形象となっている。

「もともとキリスト教の傾向的な宣伝文学である聖徒伝説が、ケラーにあっては人間的な生の意義の比喩となる。ケラーは、現世を否定するキリスト教的、神話的な象徴を、現世的・人間的なものへと転換させたのであり、かれの聖徒伝説は、人間肯定と人生肯定の表白にはかならない。」<sup>9)</sup> という指摘は全般的確なものというべきである。

「七つの伝説」は、人類の労働の所産として発達した空想力が、ケラーによって存分に駆使されて創り出されたファンタジーの世界に、冷徹なる *Realität* が、実に巧みに織り込まれており、まさに *Phantasie* と *Realität* の弁証法的止揚の位相を示めず典型的な作品なのであり、ケラーの最大傑作だと云うことができるのではないだろうか。

## 註

*Sieben Legenden* のテキストとしては、Gottfried Keller *Sämtliche Werke in acht Bänden*, Band V. Aufbau-Verlag Berlin, 1961 を用いた。訳文には、「七つの伝説」堀内明訳 岩波文庫 1951を参考にさせていただきました。

- 1) 「ドイツ文学の歴史」ハンス-ユルゲン・ゲールツ 朝日出版 1978, p. 474
- 2) 「ケラーの『七つの伝説』について」吉田正勝「ドイツ文学」第15号 日本独文学会 1955, p. 76
- 3) 「七つの伝説」堀内明 岩波文庫 p. 180
- 4) 「グロテスクなもの」ヴォルフガング・カイザー 竹内豊治訳 法政大学出版局 1972
- 5) 同上, p. 149
- 6) 同上, p. 147
- 7) 同上, p. 290
- 8) 同上, p. 142
- 9) 1)と同じ, p. 473